

静中・静高 関東同窓会 会 報

静中・静高関東同窓会
会報 第8号
昭和54年11月10日発行
編集人 月見里得知郎

総会盛大に開かる

於・築地スエヒロ

六月八日関東同窓会総会が来賓に川村同窓会副会長・渥美寿郎母校教頭・鈴木敏夫先生を迎えて、築地すえひろ大宴会場で賑やかに行われた。

当日、午前中まで降り続いた雨もカラリと晴れあがり、夏を感じさせる気候となった。

総会は月見里得知郎氏（53期）の司会によって開会。宮澤会長の挨拶の後、川村同窓会副会長、渥美母校教頭が、各々昨年行われた百年祭に寄せられた同窓会会員各位の数々の支援に対して、お礼の言葉があり、併せて母校の現状報告が行われた。

総会議事は奥野副会長（53期）が53年度の事業報告、会計報告及

び54年度事業計画案、同予算案を各々報告と提案し、万場一致で幹事会提案どおり可決承認した。

引き続き懇親会に入り、杉山栄一氏（47期）の音頭で校歌を合唱、当日の最先輩畔柳安雄氏（35期）の音頭で乾杯が行われた。

今年もここ二、三年続いている郷土色豊かな同窓会で、煮えきりオデン、黒ハンペン、玉ねぎのフライ等静岡名物が並び、百年祭の時N響が演奏した静高讃歌のテープが流れる会場のあちらこちらでは、往年の悪童にもどった四百名の会員諸氏の「オラとオマッチ」の交歓風景がみられた。

今年から新しいころみとして本年三月卒業した新人を招待した

が、彼等もこの歓談の渦の中に入
って楽しんでいた。



宮澤会長の挨拶 於・築地スエヒロ

予定時間は、たちまちのうちに過ぎ、名応援団長井出多米夫氏の音頭で校歌・応援歌を合唱し、37期大石竜彦氏の音頭で高らかに母校の榮譽と会員諸氏の健斗を祈って万才を三唱して散会した。

会までに売り切れるという大繁昌ぶりであった。

今回も、会の設営にあたって、42期岩波信平氏が会場借用で、67期成岡英彦、堀原由三、朝比奈正三、桜井昌一郎、織田三喜彦の各氏が名産品コーナーで、各々御尽力いただいたし、奥野副会長のバックアップがあったことを紙上を借用して感謝します。

楽しく愉快に過した一夜であり来年の再会を期して本年度の関東同窓会総会は終了した。

（68期・雨宮明生）

その後の同窓会活動

○五月七日 幹事会

トップランムーア社に柳川副会長他五〇名が集り次のような議事を審議した。

一、五三年度事業及び会計報告

この中で、五三年度の会計は赤字であり、前年度繰越によって、辛うじて支えられたことが報告された。

二、五四年度事業計画及び予算案
五三年度会計の状況から、事務局から会費増収を見込む積極予算案Aと会費を拠出しない会員に対する会報名簿の送付を停止する事

（一四頁へ続く）

各 期 便 り

四三回

五月七日開催された幹事会で本年度の総会が六月八日(金)築地「すえひろ」で開催されることが決つたので、四三会員に案内状を発送した。また四三会静岡本部の小杉一氏と関西支部の塚本猛次氏へも特別出席をお願いした。

当日は小杉一氏が静岡より多忙な中を早や早やと出席されて、クラス員も大喜びであった。次回も多数出席していただきたい。

当日は今井志郎、北里良夫、芹沢正憲、田崎茂夫、西沢純三、三好由三郎、吉江誠一の諸兄が出席した。坪晴行、池谷三郎、小川幹夫、小河直人、国友正一、倉沢栄吉、清水正照、長戸寛美、山家清、山村忠雄、柳沢保雄の諸兄は出張や所用のため都合がつかずに欠席された。市野誠二郎、芹沢基の両氏は御療養中のため夜間の会合は御無理の由にて欠席されたが、先ずは元氣にお過ごしで、各位に宜敷くとの伝言があった。欠席通知の井沢源治、島田富士

雄、豊島英夫、松下篤三、三宅静雄、望月猛次、山下了介の諸氏も御元氣で、次回の四三会や来年度の総会には是非出席していただきたい。

総会は四〇〇名近い大盛会で、各期入り交つての大交歓会で、夫々若き日の青春時代に戻つて校歌・応援歌の合唱や新応援歌「岳南健児意氣高し」の新人グループの熱演が披露されて、今後の同窓会の発展振りが伺がわれた。

各テーブルを囲んですえひろ特製の料理や郷土色豊かな模擬店の大盤振舞に乾杯を重ね、昔話に花が咲いた。

最後の校歌合唱には今井志郎兄が突如壇上に立つて、絶妙のタクトを振つての熱演に、満場の拍手をあびてフィナーレを飾ってくれた。

新名簿と会報第七号が当日発行されたので出席者へ配布され、欠席者には郵送した。(西沢純三)

「嘘のようなホントの話」

短かい人生だが、過ぎし日のヒ

トコマヒトコマを想起すると結構長い歳月でもある。

——超能力—— 四十年前の某日、膝関節を病み、立つこともできない母を、すゝめられるまゝ、溺れる者は鼻をも掴む気持で、下谷の某寺に連れて行つた。折りしも怡幅良い僧侶の前に中学生が坐っている。静寂。やがて裂帛の気合い! 僧侶の「さあ見えるよ」

の声に「アッ見える!」と中学生はキョトン。サクラだと即刻私は眼光紙背に徹する判断を下した。次に母が僧侶の前に腰掛ける。静寂。裂帛の気合い! 「さあ立つて」の声に母はサッと立ち上りドンドン歩くではないか! 医者にも治せない病氣はどこにいったのか、全く夢のなかのような出来事であった。

——私の戦後は終わった—— 終

戦後一年有余の某日、大陸で苦力をしながら放浪していた私が前触れもないまゝ、疎開地に住みついた家族の前にあらわれたとき、女房は真つ先に私の足を確め、そこにボロボロのズボンを見て、これは夢ではないと自分を納得させたそうだ。長い間行方不明者として片付けられていたのだから無理はない。着た切り雀の軍服と使い古したうす汚いアルミの食器は帰還

時の唯一の財産であったが、私には万感のこもった品であったから大切にしまつておいた。数年後のこと、フト見ると愛犬がこの大切な食器に頭を突込んでバクついてゐるではないか! 家人を叱り飛ばして見たものの、なんとも遅る瀬なく、その日を限りとして私の戦後にビリオドが打たれた。

——縁は奇なもの—— 十年前のこと、前触れもなしにコロンビアから親友の紹介状を持って得体の知れない紳士が訪ずれた。秋深しというのに逞しい体を純白な三ツ揃いに包んでいる。黒ネクタイでハンサムだがまことに精悍な面構えだ。挨拶もそこそこ、証券屋の私の前に大きな中南米の地図をひろげ、アマゾン流域開発の話をはじめる。二億坪の大牧場のことを、牧場の農地利用を考えていること、その牧場への自動車道は自力でつくったこと、殺し屋の十人位いはたちどころに勢揃いさせられること等々。独得の悠然とした所作を交えて、恐ろしいこと馬鹿でかいことをこともなげに語る。紹介状によると世界的に著名なエメラルドキングだそうだが、エメラルドのエの字も話さない。爾来どうしたとか、すっかり意気投合して、裸の付き合いが始まっ

た。数年後、彼の招きでコロンビアに飛んだ。首都ボゴタから車で四時間、アンデスの山々を越え、アマゾン流域に到着。それからセスナで彼のつくった自動車道を眼下に四十分ほどで牧場に降り立った。なにせ淡路島と同じ広さだから、太陽が牧場から昇り牧場に沈む。数日凡そ現代文明社会と隔絶した大自然のなかで過した。カーボーイ達の拳銃が、ここでは専ら対野生動物の武器であることを知った。忘れがたい大自然に惹かれ本年三月にも再訪した。彼との冗談話しがマコトになって、エメラルドを送ってくれることになり、自然発生的に商売を始めることになった。もう三年になる。私には本業があるので同期の西沢君に代表者になってもらっている。特級品でしかも馬鹿安だから、店を構えず宣伝もしないけれど、口コミで結構さばっている。喜んでいただけののが嬉しくて商売しているわけだから、時には大手業者まで石を譲ってくれとせがんできても本格的な商売をしているわけではないと丁重にお断わりしている。凡そ金儲け商売には縁の薄い同期生二人が、思いもかけず堂々たる宝石商(?) になっているというはなし。(柳沢保雄)

四六回

「ゴミの話」

ワイキキの浜辺でボンヤリ日光浴を楽しんでいると、前を通りかかった銀髪のお婦人がゆっくり腰をかかめるのが目に入った。

小さな紙屑らしいもの—多分メモ用紙か、レシートの切れ端だろう—を拾い上げると、まるでビニールの袋へ入れ立ち去って行った。私はこれを見て二十年前に知り合った黒人のG.I.を思い出す。彼に取引の必要からサインを求めると、鉛筆をワシづかみにして×印を書いた。ABCも書けないのかと、目を見張ったものだった。その彼が路上で煙草を取り出し、最後の一本に火をつけると、空箱を握りつぶした。しばらくの間、周囲を見廻して、捨てる場所を探している風に見えたが、そのままポケットに入れて歩き出した。

昨年ハワイの牧場に仕事があったて、現地の三世に案内してもらった事がある。彼の話によると、車からゴミを路上に捨てたのが見つかる車内の全員がおろされて、路上の清掃を強制的にやらされる規則があるということだった。

自由の土地ハワイの一面ではある。

不自由の国日本の一面と比較してみたい。我國の膨大な教育産業が何年前から初まったか知らないが、道路へゴミを捨てるなど身をもて示す事を教えるような項目があるのだろうか。

学生を混えた数組の家族が、多摩川べりの公園で楽しくおべんとを食べていた。多分この連中、自分の姓名も書けるしABC位読めるだろう。又教育産業の影響も受けていることだろう。連中の引上げたあとに新聞紙、ビニール、ジュースの缶は申すに及ばず、でっかいダンボールの空箱まで散乱していた。でも、その中のおぼさんの一人が「ゴミを片付けなさいよ!」と言うにはいいいたのだが……。

私の家の近くに一方通行の出口がある。片側は昔の上水の名残りで、ドブ川になっている。この出口で車は一時ストップする。この瞬間がゴミを捨てるチャンスだ。お役所から清掃係が来て時々このドブ川を掃除するが、一ヶ月過ぎると空缶とゴミで水面が見えなくなる。

こうした些細な事が気になるような連中は、ハワイに住んでゴミのない生活を楽しみたいものだ。それが出来ないなら、ゴミを捨て

た連中の片腕を切り落す法律をつくることだ。なんの、たかがゴミの話だ。呵々。(阿部俊一)

四八回

創刊号に各期便りを寄稿してから早三年すぎた。

今回また小生が書くことになったが、この間何人かの仲間に寄稿を依頼したが、そのうちの一人、平岩君は今はいない。

豪放かつたつな彼は、三菱商事中国担当役員としての活躍にその手腕を期待されるところ大であったが、春まだ浅い四月初め、癌のため六三才の人生をとじた。冥福を祈る。

さて四月十四日、佐倉カントリーで、関東在住の同期生ゴルフ会を開催した。

当日の参加者は飯田・太田・河村・工藤・寺尾・山崎の諸君と小生。それに太田君が美人をおつれたので会はずは和気あいあい。

成績は工藤・飯田共にベストグロス九二だったが、ハンデの差で工藤君が優勝した。従って、次回幹事は工藤君。そのうち次回御案内がいくと思う。

五月二十八日、久しぶりに京都から松平千秋君が上京したので、例の日本クラブで彼を囲んで歓迎

を兼ねて仲間の集りがあった。

彼が最近放送したラジオの修養番組(古代ギリシャの講演)のこゝと静中時代の懐旧談に花をさかせたが、いつものように終りには

お互の健康の話になってしまふ。互に身体には充分注意する必要がある。出席者次の通り。

飯田・太田・大橋・加藤・北村・近藤・佐々木・杉本・高須・寺尾・徳山・中原・福永・伏見・堀・松平・山崎の諸君と小生。

今年もそろそろ秋の気配が感じられる季節になって来たが、今年には静岡と合同の同窓会を東京側主催でやることになっている。

このため九月十二日、今回の幹事役飯田君の依頼で福永・寺尾両君と小生で第一回下打合せを行った。十一月十日開催の予定。

(原崎進一)

五三回

皆さん如何お過ごしですか。我々もこゝ一、二年で人生の新紀元を迎える時期に来ている訳ですがその為か回顧録や研究発表等の著作をものさされる級友が見られます。

筆者の所にも昨年夏、久保田隆夫君から「生徒懲戒処分の研究」を、又今年は小島操君から「Mの半生記」が贈られ、両君の盛な意

欲に感銘して居る所です。

そこで、今回は両君の著書からその一端を紹介させて頂く事としました。

小島君の「Mの半生記」では、「はしがき」の中で、

私は、昭和五十五年(一九八〇年)に還暦を迎える。

この時期に、過ぎ去った日を回顧し、これからの人生への糧とする事は、私にとって必要不可欠と考えた。

人の一生は茨の道である。人は考える輩である。時は時々刻々に過ぎて行く。貴重な時間は一生続いて行く。反省のない満ち足りた後の半生を過したいと祈念して筆をとった次第である。

私のイニシャルはMKである。ある人いわく「モテテコマル」、また、Mは男に通ずる。このMKにあやかりたいために、ある男の半生記—Mの半生記—を題名に選んだ。

と、その由来を述べ、少年期までの話の中で故郷堀之内町の方言を次の様に紹介している。

堀之内町は遠州に位置しているから遠州弁の地方である。町は東海道線開通とともに発展したから各地から集まってきた人達の寄り集まりと思われるが、「堀之内弁」

と言つてもよい方言がある。遠州弁と総称される方言は、「ずら」言葉で代表されると思う。ちゃつきり節の末尾の「……雨すらよ」(雨だろ)のずらである。

遠州弁については後藤一日先生の「駿遠方言考」に詳しく載っている。偶々文芸春秋の創刊八〇号記念号(昭和五四年特別号)に静岡県金谷町牧の原の方言が掲載された。

「コトジャヌクトイッケモンデミルイ芽ガ、ガートニデタノウ」(今年はあるたかかったから、やわらかい芽が沢山出たね)、「コノ分ジャニ番茶モ早イズラノウ」(この分じゃニ番茶も早いでしょう)。

小学校時代の友達同志の会話は次のようだったと思われる。

「アイツァー瓶ン入ッタ箱サラ投ゲタモンデ、瓶ニイミリンイツチャッタ。先生ニオコラレド」(あいつは瓶が入った箱ごと投げたから、瓶にひびが入ってしまった。先生におこられるぞ)。「ホーカモシレンナ」(そうかも知れないね)。

「アイツァーキョー学校休ミヤガッタ。多分キンノー薄衣デモンシテイタズラ」(あいつは今日学校を休んでしまった。多分昨日薄衣で

もしていたのでしょう)、「ソウズラ」(そうでしょう)。

「キョーワ暇ダデ本所川エ行カザア」(今日は暇だから本所川へ行くか)、「行カッカ、ドウシツカ、チットデ決メザア、(行こうか、どうしようか、じゃんけんで決めよう)。

久保田君はもとより教育者として著書論文はいくつもあって、今回の「生徒懲戒処分の研究」はその一つの様ですが、その中で「冷たい愛情」として、

一、生徒の非行などに忠告を与えた場合、反省しないばかりか反抗する者すらいる。そんな時、つい感情的になりやすい。しかし奴隷と逆効果である。一時の抑圧は、単なる抑圧にすぎない。しかし旧約聖書の箴言の考え方は厳しい。

曰く、「あなたの心を教訓に用い、あなたの耳を知識の言葉に傾けよ。子を懲すことをさし控えてはならぬ。むちで彼を打つても死ぬことはない。もし、むちで打つならば、その命を陰府(よみ)から救うことができる」と(二三章)。

これと稍対照的なものにロックの考え方があつた。曰く、「わたくしは、父親に非常に緊急の必要からか、最後の手段としてか、減多

なことで子供を叩いて欲しくな」と(岩波文庫)。

二、子供の遇し方も、その心身の発達段階に応じた処置が必要だろ

う。

「叩かない鉄」は可能である。学校では叩くことはできない(字教法一条)。

フランスでは、生徒を「お前」

とも呼べない(「教育法」新法律学全集、兼子仁)。日本でも教室で生徒を動物の名で呼ぶことはできない(判決)。

生徒が素直でないときは、こちらも興奮しやすいが、そこを気をつける必要がある。即ち、益々冷静に説得したい。

夏目漱石が門弟に示した「冷たい愛情」を思い出す。冷たい中にも、尽きせぬ愛情を示すことができる。

父性愛に近いものだろうか。論者はいうであろう、「そんなことでは強い人間は育てられない」と。一体、大声で奴隷鳴ったり、いやがる生徒に無理にも命令すれば、「強い性格の人間」ができるだろうか。

しょっちゅう大声で叱り、抑圧を続ければ、却ておどおどした神経過敏な、不安定な性格を作ることにならないだろうか。

道理を理解させるべく、冷静に、内に愛を秘めて説く方が情緒の安定した明るい人間を作れると思う。

と彼の広く且深い研究と見識を述べて居ます。

皆さんもこの際頭脳若返り体操として何か書いて見ませんか。

(月見里得知郎)

五四回

今回は瀬津三朗君をインタビューすることにした。

三鷹でドッグフードやペット器具を扱う株式会社アドフを経営する瀬津君の近況を会報に載せたいと思いたち、電話したところ、忙しい時間をさいてくれて、三鷹の駅前で会おうということに相成った。

ある月曜日の夕方、三鷹の駅で待ち合わせると、駅の西にある彼が行きつけの川魚料理屋の「富司屋」へ案内された。

鯉が泳ぎまわり古風な水車が軋む池をまわって、こじんまりとした一室にあがる。きりたんぽが煮える鍋をつつきながら気軽に雑談に入る。

——誰でもそうだろうが、静中を出てから上級学校が一緒だったり勤め先が同じでもない限り、大

低は学友が今まで何処で何をし、どうなったかは分らない。君がベツトフードを取扱っている株式会社アドフの経営者であることを聞いたら、さぞ驚ろく人達も居ることだろう——

僕は静中を出ると、慶応の文学部社会学科へ進んだが、その時同輩で慶応へ行ったのは医学部へ行った益頭尚道君だけだった。

戦争にぶつかって、ご多分にもれず学徒兵となり、陸軍通信学校へ入り見習士官になった。

野戦は中国大陸に行き、終戦後も留用され、二十二年四月に広東から横須賀へ帰って来た。

帰国後は、静銀の本部に半年の間就職し、その後、東京へ出て日本水素工業に十年程居たが、社長が例の日野原氏で、そんなことから昭和電工にも半年程居たことがある。

そのあと、伊豆長岡カントリークラブで四年ばかり支配人をして

いた。

——その頃だったか、君からゴルフ場の案内があつたが、生憎と僕はゴルフが出来なくて断つたことを覚えてる——

そのあと労務管理士と計理士の仕事を身につけ、商店の計理などしながら片手間にドッグフードに

手を出したのが本業になり、八年前から計理はやめて、専門に全国へ卸す商売を始めた。今では世界の関係材料を手掛けている。新し

草深の家には兄がいる。静岡といえは、静岡の西武百貨店七階のコリーナにアドフの静岡営業所があり、日曜日は大抵居るから、つ



福津三朗氏御一家の近影

いとこでは、犬の生命保険を企画している。

——静岡のお宅は今どうしていますか——

いでの折に寄ってほしい。

——ご家族のことについてお聞

きしたい——
夫婦と娘二人の四大家族(写真

参照)だが、次女は立川女子大卒業後、伊藤忠商事に勤めている人と結婚して、いまは長女と三人暮しだ。長女はというと、まさに蛙の子は蛙だな、日体大を出て、スイミングクラブのコーチをしている。

——君の静岡時代のこと、どうしても触れなければならぬことは水泳のことだと思いが——

静岡へ入った年、幻の東京オリンピックの強化訓練に参加したことは、僕自身にとっても一番印象が深い。戦争のために、東京開催はとりやめになってしまったけれども、当時、中村豊先生(クマサン)が部長で、神田福治先生(土方)がコーチだったので、中村先生の化学、神田先生の体操、それに新井先生だったか工作の時間は全く授業に出ないで我武者羅に泳ぎまくった。いろんな先生から候補者ということで特別な取扱いを受けたので、その期待に応えなければと、一層練習に励んだ。

林先生(ボンチ)は、僕にあてての順番を覚えてくれたし、沢先生は、夜、幾何の個人教授をしてくれたことを今でも有難いと思っている。

——あの頃、上級生では近藤・ス波・足立等の諸先輩が居たけれども、ブルルに対する眼は君と高木君の一年生に集中していた。君は、いつも流れるようなフォームで他をリードしていたが、高木君は彼一流のギクシャクしたフォームだったことを覚えている。元来馬力があるのか、君に一步もひけをとらずに争ったものだ——

高木君は長距離泳者だったが、僕は中距離泳者だったので、記録は二百で二分二十六秒、四百は五分一秒が最高だった。

——静岡時代の友達では誰を覚えてる——
小学校からの黒水君や石野(大賀)君、水泳部では勿論高木君、それにブルルの横がテニスコートと卓球部だったので、山田・沢井・高山・田中の諸君と、悪童仲間では入谷・大倉・川井などの諸君といったところかな。

——ところで趣味は——
僕は元来無趣味で、強いて言えば仕事に興味だろ。前の仕事の関係でゴルフをたまにやるとか室内プールには行ったりする。

——将来は——
今、従業員は十一人居るが、次女の主人を引張って来て営業をやってもらっている。将来は仕事を彼に任せて、自分は伊豆の松崎あたりでヨーロッパの繁華を

やってみたいと考えている。

——静岡の愛犬家のみなさんには、全国どこでも大サービスで奉仕しますから、犬のことなら何でも相談してほしい。

一ケース売って三百円の利益しかなくても、商道に徹し、時には大小屋の掃除までやって、口コミから信用を拡めて行く心構えで頑張っている。

——メートルも上がり、話は尽きないが、まだ仕事などの事で、残念ながら話をそれまでにして、再会を約し別れを告げた。

こんなインタビューでよかったらどなたでも小生あて申込んで下さい。商売上のPRでも尋ね人の広告でも、何でもどんどん引受けまっせ。まかせといて。

五五回

(庵原梯次)

六月八日の関東同窓会総会で久しぶりに吉川君と歓談した。

実は幹事たる小生の怠慢で、吉川君が関東地区に在住していることを知らず、したがってこれまで全然連絡しなかったから同君と会えなかったのは当然である。同様な事情で関東同窓会の名簿から洩れていたクラスメイトに、小沢忠樹・吉田盛昭の両君がいる。小生の

調査不十分をお詫びする次第である。

一方、千葉に住んでおられた武田政男君が郷里の静岡へ帰られた。静岡にはクラスメートも多いので、武田君も何かと心強いことであろう。同君の静岡でのご発展を祈ってやまない。

総会には、吉川君のほか、高橋恒三、中田吉信、武井富夫の諸君の顔も見えた。また、母校からは吉川晴夫校長に代って渥美寿郎教頭が学校側を代表して出席、あいさつされた。めぐり合せとはいえ、百年祭のめでたいときに、母校の校長と教頭がともに五十五期生であるとは、われわれの誇りとするところである。

五十五期は毎年一回関東地区在住者のクラス会を開く。五十五期の総幹事山本礼司君も静岡から参加する。次回のクラス会もまた盛大にやりたいと思っている。

(相川富士雄)

五七回

静岡を卒業して既に卅七年、私は以来再び静岡に住む機会を得ぬままに今日に至り、息子達は全く静岡を知りません。

他にもそういう方が居られることと思いますが、静岡は海の幸、

山の幸に恵まれ、気候もよく人情も厚いというわけで誠に住み易い処で、昔から他県に移り住む人は比較的に少なかったようです。

大学が無かった関係上止むを得ずその間静岡を離れた人も、卒業すると大方は再び静岡へ帰る人が多かったように思います。

そんな時代に父の反対を押し切って北海道へ赴任した私は十年位経ったら静岡へ帰りたいという気持ちもなかったわけではありませんが、結局その機会も得ぬままに東京の生活も既に卅年を越えることになってしまいました。

北海道に赴任した時、その事業所に静岡県人が唯一一人居りまして当時の掛川中学の卒業生でしたが大へん懐かしがって歓待してくれたことが印象に残っております。

今では各界に於ける中央の重要ポストに多くの先輩後輩の名前を見掛けるようになり、五七期生もその四分の一以上が関東同窓会の名簿に名前を連ねておられることは大へん心強い次第であります。

社団法人日本経営士会というのがありまして、私は十数年来関係しております。昨年、関東の研究会で計らずも原崎勇次君の発表を聞く機会を得てお互に突然の再会を悦んだわけですが、今年

になって更に又、岡田久男君と机をならべて「オペンキョウ」するというチャンスに恵まれ、卅数年振りのこの感激も亦一汐でした。研修会最後の懇親会で岡田君と肩を組み、岳南健児一千の……と声高らかに静中の校歌を合唱し、一同の拍手をあげたのであります。

岩井君や堀江君には日頃何くれとなく御世話になっておりますが東京商工会議所の工業部会では時折月見里君と顔を合せたり、又酒井君には息子の就職の面倒をお掛けしたり、最近急に又卅数年前の様なお付合が戻って参りました。

関東同窓会をまとめて下さっている奥野先輩(五三期)の事務所が元駿河台にあった頃のそのビルに私が今勤めているということも全く奇縁と言わざるを得ません。

人はいっ、どこで又御世話になるか解らぬものだつくづく感じております。我々の同期生は恰度満五五才という年を迎えて、これからが一層お互に助け合っていかなければならぬ時期ではないかと思えます。

私には弟と妹が合計卅人いますと言ったら耳を疑う方も居られることでしょうが、私が九人兄弟の長男で家内に八人兄弟の長女ということで、計算上どうしてもそう

なるようです。公私共に多忙な毎日ではありますが、所詮人と人との付き合いが人生であります。宜しく御指導御鞭撻の程御願ひ申し上げます。(藤巻重男)

五八回

「幻のかん声」

父の職業の関係で、城内東小六年から静中の五年間、それに戦後二十七年から十二年間を静岡の地で過ごしたが、私はもともと関東の出。郷里は筑波山系の加波山の麓にたらずまう小さな山村である。

幼児のころからじいさんばあさんに育てられた私は、小学校の四年までそこで過ごした。もう四十年以上も昔のことだが、そのころの「遊び」の思い出は今も鮮やかである。

七十戸ほどの集落のほぼまん中にあるわが家の前庭は、子どもたちのたまり場で、そこにはいつも日の暮れるまで、幼いかん声が満ちあふれていた。

遊びの種類によつては、時に他のもつと広い前庭や神社の境内に移動したりもした。また、春秋のキノコ狩り、冬のメジロ獲り、夏の水遊びや魚とりは、集落をとりまく野山や小川や池や田んぼへと

子どもたちの行動半径をひろげた。兵隊ごっこでは、隣りのむらにまで「攻め込む」こともしばしばだった。

いわば、むら中が遊び場だったし、遊びの種類も実に多かった。

ところが今はどうか。父なきあと、ひとりわが茅屋を守る老母の様子をみるため時々帰郷するのだが、そこには子どもたちのかん声は全くない。部落長をつとめる旧友の話では、子どもの数は昔と余り変わらないという。

ではなぜ……？ 幻のかん声になつかしむ私の質問に彼は、「みんな家さ閉じこもって勉強がテレビだっべ」と苦笑する。そういえば四、五年前、むらの入口に「ピアノ教室」の看板を見てガク然としたことがある。

むらの大人たちは、誰もが「これでは困る」と思いながら、はるかに農業収入を上回る兼業収入を求めて、そんなことを話し合う寄り合いも持てないのだという。この旧友とて、むらでも有数の大百姓なのだが、田植えや稲刈りの時期を除いては、毎日のように土建などの「通勤出張ぎ」に出ているらしい。

以上は関東の小さな山村部落の一面だが、おそらくそれは、日本

のどこの農村にも、また、「遊ぶ」として、遊ばせようとしても遊び場がない」という都市の中にも共通する、たいへん重要な問題を提示しているように思う。

つまり、真に子どもの「健全な成長」を希うならば、教育の現状、大人たちの生き方、地域社会のありようを、三位一体のものとして今こそ改めて問い直し、できることから改善の手を打っていくべきだ、ということである。そしてそのためには、国レベルでの抜本的な対策もさることながら、まず、コミュニティレベルでの決断と実行こそ優先すべきだと思う。

そのような実績もまた、決して少なくないのである。

(猪瀬忠賀)

六〇回

何かのキッカケを掴むと言うことは何によらず必要なことであるが、とりわけて同級会の様なことは何かキッカケがあるとやり易いものだと言うことを痛感したので今回の60期同級の集いであった。

たまたま凸版印刷の山本雅之助君の会社へ行った折、そろそろ集りをやろうかネと話し合い、講談社の上杉君に電話したところ「今

珍らしい人が来ているから電話口に出すよ」と言われて出て来たのがローマ在住の岡村崔君だった。早速集まれる人だけでも寄り合っって一席と言うことになり、近く同級の諸君に連絡をとることにして電話を始めたが出席の返事が意外に多い。そこで後々、何で俺にも連絡してくれなかったと言われても具合悪いと思ひ、当初5、6人と思ひ始めたことが結局20人の出席予定者となつてしまった。

そこでキリンビールの原田君に設営をお願いしてまとまったのが、9月13日の同級会となった。当日迄の僅か2、3日の間に、単なる何人かの集りと考えていたのが立派に同級会の形になったのは60期の団結の強さか、はたまたオトンなのか。神奈川・千葉の人も多いので、東京駅近くの八重洲大飯店を選び、当日集まったのが16名。写真の様に万年青年の自信がややグラツキかけた面々が参集した次第。



60期の集い 於・八重洲大飯店

1年置きに集まろうと言うこと

で51年53年とやってこれが3回目である。転勤等の事情もあつて今回初めての人が3人、下谷病院の井出裕雄、神奈川ダイキンの八木義之、NHKの柴田正臣の3君である。当日急用で欠席した4人の

中にも太陽神戸の有田君、清泉女子大の里見君など初顔の予定者もいた。特に多忙中遅くなり乍ら馳せ参じてくれた柴田君、ここ1、2年体調の思わしくなかった筈間君も出席し往年の気力の一端を見せてくれたのも嬉しい

事だった。鈴木吉明の気概は何時ものこと乍ら感服する。これがサッカー魂と言うものか。

岡村君は毎年ローマと日本を往復して国際的に大活躍しているが同君の在京時に合わせて会をもつ様にしてるので皆勤である。第1回の時には日航ニューヨークの清水昭雄君も出席している。

さて、会は何を重ねる毎に昔の面影が濃くなり、相寄る気持が高まるのが同級会のもつ良さであろうと感じている。毎回の様に談論風発、予定時間を大巾に超過して尚尽きる所を知らず、次回は来春にでも静岡の諸君と合同で熱海か伊豆箱根辺りで一泊でやろうと決議した。どうもネクタイつての2、3時間では不十分、裸になって飲み、食ひ、時の経つのを忘れて交歓しようと言うことである。

静岡の佐藤佑信君や名波君にお世話になることになろう。

校歌、応援歌を斉唱して盛会裡に散会したのは10時近かった。

仕事にも、身体にもいろいろ重み加わり、友の体調が他人事ではなく感じる頃、分け隔てなく話し理解し合えるところが同期の良さであろう。中にはポツポツおじいちゃんも出て来ているが、写真は勿論、素顔を見ても誰がそうなの

か聞かなくては判じ難い所が面白い。

60期在京万年青年はやはり健在だった。

(野呂実)

七九回

八月の暑い日に、石岡駅へ降りたら、球友の島君が待っていてくれた。彼は、七年前にサラリーマンをやめ、茨城県小川町に鶏舎を持ち三万羽を飼っている。百里基地のすぐそばで、ファントムの音が台地をながれる風につて聞こえてくる。落花生、たばこ等作物も東京砂漠から来た人間には、めずらしい。彼の所有地は、約二町歩。一反四十万円で買ったそう

だ。

一坪や一坪単位でないのにえらく感心。鶏舎一棟百米もある。使用人は三名。この主人は、腕は太く、不機嫌そうな顔と、人のよさそうな笑顔で、美しい奥様と三人の子どもに囲まれ、ここにとりと同じように健康そうに生きている。ただ私にとって、正月に静岡で高校卒業後続けている野球部の「飲み会」に彼が参加できないのが残念だ。働いてくれる人々は正月だが、にわとりは正月もなく、卵をうみ続けているからだそう

(上田尚亮)

九二回

「さあレポートじゃ！」

大変じゃ！」

一般に理科系の学部・学科の学生は忙しい、という事になっていきます。私がいる東大工学部の他の学科の三年生達も「製図だ、実験だ」と忙しい日々を送っているようです。ここに一つだけ多少暇な学科がある。何を隠そう、私の都市工学科です。「あの学科は文学部に入るんじゃないか」などと時々陰口を叩かれたりもする。確かに学期初めなどには、うちの学科の学生が（私も含めて）ドットと文学部の授業に出たりなんかしています。（学科発足以来十余年というまだ若い学科で、単位は他のどの学部学科のものでも認定してくれるわけです）

さて、本学部は十月一日からが試験。四年生で会社訪問をする人は、解禁と重なって大変でしょうが、こちらはそんな心配をしている暇もありません。日頃の不勉強のタタリか、青い顔をして講義ノートのコピーの交換が、真盛り。学科の友達同士集まれば、ワイワイと試験の話ばかり。

と思つて、九月に入つて授業が始まり、久方ぶりに緊張した日々

（？）を過ごしていたのですが、何と続々と試験がレポートに変更になってしまい、若干肩すかしを喰らつたようでもあります。「レポート出しさえすりゃAさ」「楽勝、楽勝！」とその度に、授業中に歓声は湧くものの、私のような不勉強には、それにしても頭の痛い限りです。

そこで如何に自分の不勉強を隠して、単位を取る（それもなるべくならAを取る）か、の「レポート書きの技術」というものが登場する。

第一に、表紙とか書き出しは、いかにも「真面目学生風」にビシッと格好よく決まっていなきゃいけない。内容に因つて言うならば文章題ならできるだけ長々とするのがまず第一に大切である。先生が見て、すぐ読むのが嫌になつてそのままバツと単位をくれる、というタナボタの確率があるかも知れません。自分が確実に知つてゐる事はもつたいていぶつて針小棒大に書く。よくわからないようなところはグチャグチャとわざと汚なく小さく書く。理数系の問題の時はボロが出ないように、簡潔明瞭を装つて短く書く、他人に教えてもらつたり、又さもなくば他人のものを丸写しせざるをえなかつた際

は、（あくまで「こりゃあバレルな」と恐怖した時ですが）「○○君と一緒に勉強・討論して書きました」などというような、白々しい但し書きを入れて置く。それからこれが大事なのですが、何やら昔風「師弟」関係を連想させる、その教師との「親しみ」をどこどこ匂わす。あたかも熱心な聴講生であつたかのように、「先生には本当に色んな事を教わりました」という御丁寧な嘘もつく。

まあ、しかし敵もさるもの、手抜きレポートにはちゃんとそれなりの点がついてきます。「さすがア」と返つて来た成績表を見て「こちらが極めてあげたくなるくらい。けど、やはりそれにしても点数は普通、（ウチの学科の場合です）随分と甘いそうです。やはり、「学生の時はウンと好きな事をやっておきなさい。勉強は社会に出てから、大学院に入つてからやればいいから」という、先生方の温情なのでしょう。

今年の都市工の卒業生の学年は合コン（「女子大生とグループで酒を飲みに行つたり、ディスコに行つたりする一種の集団見合い」）を二年間に七十数回やったそうで私のいる学年は今それに迫る勢い

で遊び回つてゐるの事。先生によくとやっております。（但し、私はそれほど合コンには行つておりませんので、誤解なきように）
九月三十日記（清水 篤）

ゴルフ

第六回印高会ゴルフ大会
開催日 六月十三日（水）

場 所 伊豆大仁CC

優勝 石川 宏氏（71期）

準優勝 山崎勝吾氏（56期）

第三位 奥沢 徹氏（59期）

参加総数 十七名

第七回印高会ゴルフ大会

開催日 九月二日（日）

場 所 伊豆大仁CC

優勝 小坂 博氏（67期）

準優勝 富田 澄氏（57期）

第三位 田中俊男氏（66期）

参加総数 二十八名

第六回大会よりキャロウェイ方式をやめ、自己申告ハンデといたしました。

なお御案内状はエントリーされてゐる方々のみ発送させて頂いておりますので登録漏れの方は、ゴルフ幹事成岡（67期）迄御一報下さい。

新宿区西新宿七―十四―九 規格ビル
（佛）ユニオン設計センター内

成岡 英彦

アラビアの地に

十五年を過して〈完〉

鼠 入 武 夫 (32回)

何か前方に、まっ黒な柱が立っ
ていて少しづつこちらに向って移
動しているのを見つけたが、

そのまま車を走らせていったとこ
ろ、車のフロントガラスにびしび
しと砂があたる音がし始めまし
た。この竜巻きは私が進もうとし
ている道路沿いに米つつあったの
で、これに巻き込まれては大変と
思い、ダンマンに引き返した訳で
す。ダンマンの宿舎で大きっぱな
計算をしてみましたところ、夜八
時頃ダンマンと国際空港のあるダ
ハランという町を襲うことにな
り、もしこの時間にダハランの空
港に着陸しようとする飛行機があ
れば、この竜巻に巻き込まれ大事
故になる恐れがあると、ダンマン
在住の日本人職員に話をしまし
た。この予言は不幸にして当り、
翌朝知ったことですが、中近東航
空のジェット旅客機が運悪く着陸
態勢に入ったところでこの竜巻き
に襲われ、そのままアラビア湾に
つつこみ、乗務員と乗客約五十名

が死亡したという事故が起きまし
た。

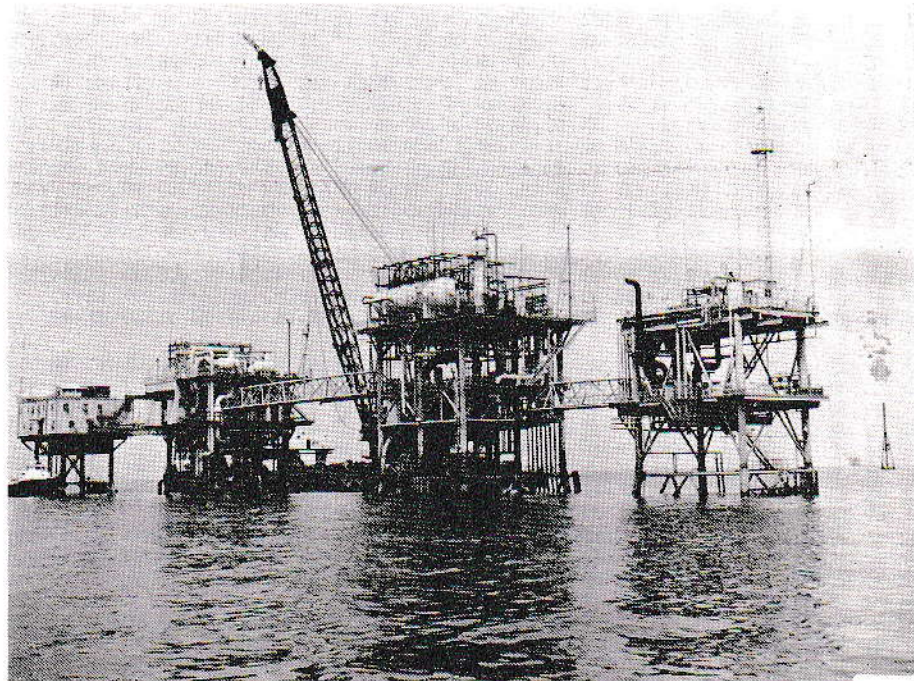
その朝、カフジまでの帰路、海
岸沿いの道路を走ったところ、海
面に尾翼の一部が突き出ている姿
を見、遭難した人達に對し思わず
合掌した次第です。

この時は竜巻きを逃げた訳です
が、数年後ダンマンからの帰路、
再び竜巻きに出合いました。

この時の竜巻きは前回のものよ
りはるかに大きなもので、目の前
に十キロメートル以上の巾を持つ
た黒ずんだ砂のカーテンが天から
下がっている感じでした。前回逃
げたのが何となく悔まれていたの
で、今度は竜巻きの中につっこん
でやろうという氣を起し、いや
がるアラビア人の運転手をおさえ
て前進しました。案の定、フロン
トガラスに砂がぶつかり始め、こ
れにかまわず走り続けたところ、
間もなくあたり一面がまっ暗にな
り、二トンはあらうと思われるビ
ューICKが下から持ち上げられ始

めました。これ以上進むことは危
険だと思い、車を道路ぎはに止
め、どの位辛抱すれば竜巻きが通
り過ぎるかわからなかったので、
車のエンジンを切らせエアコンを
ストップさせました。車は気密に
なっていると思っておりましたが、
みるみるうちに細かい砂がシ
ートにたまり始め、熱氣とこの砂
で息苦しくなつてまいりました。
じっとしていたのでは危いと思
い、時折わずかに砂の隙間から見
える道路の端をたよりにのろのろ
と車を走らせましたが、ヘッドラ
イトをつければ砂でライトが拡散
されて用をなさず、結局数メー
トル進んでは止まり、また数メー
トル進んでは止まり、といったこと
を繰り返さざるを得ませんでした。
この時、砂の隙間から駱駝の姿
が見えましたが、どの駱駝も風下
に向って前足を折って地面にびっ
たりと座り込んでおり、子供の頃
によく絵本で見た砂嵐の時の駱駝
の姿通りであることをこの目で確
かめることができました。

結局、二時間程で竜巻きは通り
過ぎましたが、後で車を見たら、
車の前部はサンドブラストをかけ
たように塗装は完全に落ち、フロ
ントガラスはくもりガラスのよう
になっておりました。



遠くに見える火は、沖合で石油から分離されたガスを燃やし
ているところだ。一番左のプラットフォームは作業員の居
住区です。左より二番目のプラットフォームは、カフジ原油
の集送所です。次のプラットフォームがフット原油の集送油
プラットフォームです。二番目と三番目の間に見えるクレ
ーンは、バージの上に乘っているもので、五〇〇トンの吊り上
げ能力があります。

何と馬鹿げたことをやったのかという思いと、ついに竜巻きの中を通ったという満足感が入り交じった複雑な気持ちを味わった訳です。

十二、駱駝と二度衝突

駱駝は、かつては砂漠の民にとって唯一の交通機関でありました。もともと、今では道路が発達し自動車輸送が行なわれるようになったため、駱駝を輸送に使うことはまずありません。現在の駱駝の効用と言えば、乳をとること、毛をとること、生後数ヶ月の駱駝を食用に供すること位なものです。が、それでも砂漠の遊牧民にとっては重要な財産のひとつとなっております。

普通、この駱駝は、砂漠の中で草のはえている地域に放し飼いをしておりますが、これが、しばしばハイウエーに出てまいります。今から約十年前の秋のことでしたが、クウェイトの飛行場からカフジへ戻るべく真夜中に車を走らせておりました。疲れていたのでしょう、車の中で眠っておりましたが、何となく目が覚めました。ひょっと前方を見ると、道路上に大きな駱駝が二頭立っています。車のスピードは百キロメートル以

上は出ていたと思います。運転手は当然気付いているものと思つて見たところ、タバコに火をつけようと車のライターを取り出すため横を向いており、駱駝には気がついていない様子でした。大声をあげて注意したのですが、もはやその時には手遅れで、駱駝が目の前に大きくうかびあがったと思った瞬間、「ガチャン」という大きな衝突音と共に私は後部のシートから前のシートへ跳ね飛ばされ、意識を失いました。

どの位たったか解りませんが、意識が戻ってまっさきに、「あ、俺はまだ生きているな」と思い、何となく顔面がぬらぬらするので手をやってみると、べっとりと血がついているのが月明りをおしえて見えました。車の上部は大破しましたが、エンジン部分とホイール廻りは無事であったので、のろのろ運転をして、ようやくカフジ基地にたどりつき、直ちに手当を受けました。

目と鼻と口を除いては、頭も顔も包帯で巻かれましたが、それでも意地を張って、一睡もせず事務所に行き、出張報告を兼ねて直ちに部長会を開いたことを今でも憶えております。

その後、日本に戻り、精密検査

を受けたところ、脳内出血の疑いがあるということで入院させられました。が、脳血管撮影の結果では出血徴候は見当らず、事故の度合いから見れば連よく助かったものだと思っております。もちろん駱駝は即死しましたが、その後しばらく誰からもクレームがついて来ないので、持ち主がいらない駱駝だったので、持主ではないかと思ひ、やや安心していたところへ、やはり持ち主が現れ、損害賠償の請求をして来ました。十五万円という要求をアラブ人の従業員が一生懸命値切つて、十二万円まで値引きさせたという事です。

私がこの事故に逢つた数日後、アラムコ社のアメリカ人がやはり同じような事故にあつたそうですが、この時は駱駝に衝突する前にブレーキを働かせたため、駱駝に衝突した際、駱駝の身体が運転席の上にのしかかった恰好になり圧死したということです。これは後でサウジアラビア石油省の次官から聞いた話ですが、駱駝に衝突する際には、むしろスピードを落さないでいる方が助っているケースが多いということで、この点から見れば、私の車の運転手が駱駝にぶつかる直前にタバコを吸おうとして前方への注意を怠り、スピ

ードを落さなかったことが幸しいといつても言えることになりました。

実はこれと全く同じ事故をそれから三年後にまたやりました。この時は前回の経験があつたので、ぶつかる寸前に防御姿勢をとつたため、顔面、手などはガラスの破片で傷を受けましたが、前回に比べればはるかに上手なぶつかり方をしました。この時も乗っていた車はビュイックで、これまた全損になりました。ただ第一回目と第二回目との間に事故の処理については非常に大きな相違がありました。というのは、第一回目の場合は私は駱駝を跳ね飛ばして殺したということに加害者の立場におかれた訳ですが、第二回目の時は、この事故が起きる前に勅令が出て駱駝を放し飼いにし、これがハイウエーに出て自動車事故を起こした場合は、車輛の損害と人身の傷害に対する一切の責任は、駱駝の持ち主が負わなければならないことになったため、私は被害者の立場になったということです。第二回目の事故の後、直ぐ警察署長が見舞いを兼ねて訪ねて来て、事故に関するステートメントの提出を求めてまいりました。このステートメントを渡したところ、何か言

いにくそうな顔をして、「実はこのステートメントの最後に損害賠償に関する一切の請求権を放棄する旨書き加えてもらえないか」と言い出し、「もしこれがないと、駱駝の持ち主は大きな負債を背負うことになり、到底これを支払う能力は考えられないので、結果的には入牢せざるを得ないことになる。ついでには何とか考えてやってくれないか」と頼み込んできました。

幸い傷も浅いことであつたし、車も保険に入っていることでもあるし、敢て責任を問う必要もないと思ひ、快く請求権の放棄をした訳です。

駱駝を放牧するということは、アラビアにおいては歴史的なものであり、遊牧民にとって慣習化されているものです。従つてこれを禁止する勅令を出すには、それ相應の背景がなければなりません。サウジアラビアは石油収入を基として国の近代化、工業化を積極的に行進める政策をとつて来ておりますが、これに不可欠な労働力は極度に不足をしております。この勅令が出たのは、この労働力不足を解決するには遊牧民の定着化を図らなければならなくなつたことと、駱駝による自動車事故が増

え、この対策を立てなければならなくなつたことにあつたようです。二度の駱駝との衝突事故は、恐らく誰もがまだ経験したことのない珍記録であらうと思います。

今でも前額部に傷が残っておりませんが、これこそ私のアラビアにおける十五年の生活の記念だと思っております。

(おわり)

イルカと人間(2)

35回大村秀雄氏の著書から

編集委員 月見里 得知郎

英国とイルカ

国際捕鯨委員会の会議はロンドンで開かれることが多い。それは事務局が、現在ケンブリッジにあるが、一九七六年まではロンドンに あつたからである。しかも一九五〇年代には三月下旬に特別科学小委員会が開かれ、六月に本会議が開催され、一年に二回ロンドンで会議が行なわれるのが慣行となつていた。私は一九五一年の第三回の会議から一九七六年の第二十八回会議まで、毎年出席を命ぜられたため、ロンドンに行く機会が誠に多かった。

いつのことであつたか忘れたが日曜日に街を歩いていると、ここでイルカの大群に出合つたのであ

る。このイルカは正しくギリシャ・ローマのイルカであるが、ローマのそれとは異なっている。ローマのイルカは著名な彫刻家の作つたものであるが、ロンドンのイルカはそうではない。もっと庶民的なものである。多くは電柱などの飾り物である。したがってその数は夥しい。例えばバックingham宮殿前の大通り、モール街に並んでいる電柱という電柱には、みなイルカの飾り物がついている。イルカの大群というのはこのためである。

これらのイルカについては後節でもっと詳しく述べるが、ギリシャ・ローマのイルカがいつ英国に渡つたのか、これが興味のものであつた。考えられることは、ルネ

サンスの波に乗ってやって来たのか、或はこれよりも遙か前の、ローマ人の英国侵入と共に海を渡つて来たかである。いくら本を調べてみても、こんなことは書いてない。長い間の疑問であつたが、一九七〇年六月のある日曜日に、セント・アーパンスのローマの遺跡を訪ねるに及んで、ローマの英国侵入、つまり紀元一世紀かそこらの時代に早くも英国に渡つてきたことを知つたのである。

セント・アーパンスはロンドンの西北約三〇キロメートルの所に

遺跡が発掘されたものは、野外劇場のフォラムの一部だけである。

この出土品は博物館に集められていたから、われわれもここを訪れた。あまり大きな建物ではないが、夥しい収集品である。銀貨もいろいろあつたから、私もそれらを一々覗いて歩いた。

イルカを图案とした銀貨はないものかと捜したが、遂に見つけることはできなかった。蠶の類などもあつたから、これも丹念に見て廻つたが遂にイルカは発見できなかった。

ところが中央の奥まった所に、発掘された床のモザイクがそのまゝ復元されて展示されていた。その模様は疑いもなく、ギリシャ・ローマのイルカである。

このイルカは吻が大きくて、前に突き出ている。その形はいわゆるししっ鼻、つまりシモである。

体は割合に細っそりしているが、頭の部分は大きい。眼も丸くて大きい。それより後方に延びている線は何であるか。背ビレは頭の上にあるが、二つに分かれていて

これは典型的なヘレニズム時代の尾ビレである。胸ビレはずいぶん前についているが、これも三つに分

かされている。中央の支柱に支えられた蠶のようなものは何であろうか。かがり火を燃やす容器のようにも見えるが、中心から左右に波状の線が描かれているから噴水を形どつたのかも知れない。噴水とすれば、この図はやはりポセイドンの神話から来ているのである。

このようにしてセント・アーパンスの博物館を訪れて、私は初めて英国のイルカは、ローマ兵と共に海を渡つてやって来たことを知つたのである。

ハートフォード家と シヤチホコ

セント・アーパンスのローマの遺跡を見物した帰り道に、私たちはハートフォード家に寄つた。これはハートフォード侯爵のロンドンにおける住居だつた建物で、広大な敷地の一角に宏壮な建物があり、ここに夥しい量の美術品が集められている。

このコレクションの中には絵画があり、彫刻があり、陶器があり、一巡するのにずいぶん時間がかかる。同行の三人はなかなか熱心である。一つ一つ細かに見て廻っている。彼等は何れも近親感を抱

くのであろう。私はどちらかと言えは早や足で歩いていったが、ある部屋の前に驚くべき物を発見した。それは中国の建物の模型である。材料は多分象牙であったと思うが、二階建の中国の建物がいくつか並んでいる。説明には湖月楼と漢字で書いてある。私を驚かせたのは建物そのものではなくて、屋根の上に立派なシャチホコが並んでいることである。湖月楼が中国のどこにあるのか、又はこの建物がどんな由緒のあるものか知らないが、名前からみて洞庭湖のどこかにあるに相違ないと考えた。ハートフフォード家には著名人が多く、各国の大使などを行った人もあるから、おそらく中国の友人から贈られたものであろう。年代から言えば一九世紀又は一八世紀であろう。いずれにしても中国に日本のと全く同じシャチホコがあることは、この時初めて知ったのである。

来たとき考えるのが妥当である。後になって判明したのであるが、日本の大建築家の大屋根の上にある鰐尾は、中国の鰐又は鰐尾から来たものであって、これは海にすむ海獣である。中国の揚子江や洞庭湖にもイルカはいる。ただしこのイルカは小形のヨウスコウカワイルカとスナメリであって、鰐又は鰐尾のような超能力を持った怪物ではない(この点については後章で述べる)。中国の鰐の原型がギリシャ・ローマのイルカであるとすれば、その通って来た道はシルク・ロードということになる。

ロンドンのイルカ

次にロンドンのイルカを案内したいと思う。不思議なことにロンドンのイルカ見物は、普通の観光ルートに従って歩けばよいのである。

まずロンドンの中心地トラファルガル・スクウェアから始めよう。この名前はトラファルガル海戦を記念してつけられたもので、有名なネルソンの像がある。

この像は花崗岩製の高さ一八四フィートのコリント様式の塔の上に立っている。像自体の高さは一六フィートである。この像の後方に広場を大きく占領しているのが二

基の噴水である。この噴水はイルカの噴水であって、数匹のイルカが人間に抱えられたりしてその口から水を噴き出している(図7)。ただしこのイルカはギリシャ・ローマのイルカではない。おそらく、その点では誠によく出来ているが、面白味はない。



図7 トラファルガル・スクウェアのイルカの噴水

したイルカである。(図8) このイルカは完全にギリシャ・ローマのイルカである。頭は丸く眼は大きく、クチャビシはぐつと前に突き出ている。背ビレも頭の上にある。トラファルガル・スクウェアの噴水のイルカとは全く別である。

さて。次はバッキンガム宮殿そのものであるが、もちろん一般人は中に入れない。前面に鉄の垣根が巡らしてあって、入口には衛兵が立っている。この鉄の垣根の所々に石の支柱が立っている。この支柱の一番上には照明灯が五個組み合わせてあるが、その中に奇妙なものがある。この奇妙なものとは動物である。それも一種類ではなくて、いろいろの動物がいる。柱によって異なった動物が、それぞれその上に乗っている。ライオンもあれば馬もあり、顔の真ん中に角の生えたユニコンもいる。これらの動物に混じってイルカもいるのである。

このイルカは四角な柱の四隅にそれぞれ一匹ずつが倒立している。これは典型的なギリシャ・ローマのイルカである。

ここでバッキンガム宮殿に別れを告げて、今来た道を逆に戻ろう。ただし今度はトラファルガ

くここに登場している人物は、ギリシャ神話に出てくる、海の神様ポセイドンとその子のトリトンである。しかしながら人物もイルカそのものも、全く写実的であっ

広いモール街がバッキンガム宮殿へと続いている。このアーチウェイをくぐった所の左側にチャールス一世の銅像がある。この銅像の台座の四隅を飾っているのが倒立

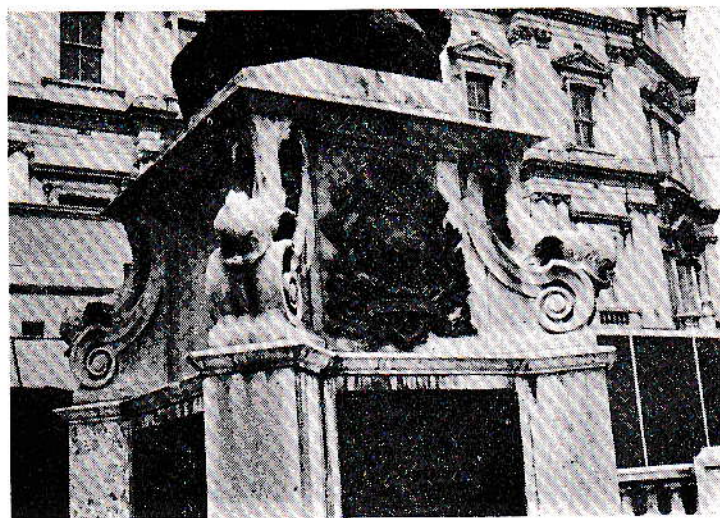


図8 チャールス1世の銅像の台座のイルカ

ル・スクウェアに戻らないで、アーチウェイをくぐって右に折れて、ホワイトホール街に出る。少し行くと右側にホース・ガードがある。小さな門があつて、その左右両側に馬に乗った衛兵が立っている。これもロンドン名所の一つである。この門ではなくて、その一つ手前に、つまりトラファルガー・スクウェアに近い方にも小さな門がある。この門柱の一番上

には馬が一頭づつ向いあつて、その少し下の所に四角なレリーフがはめ込んである。このレリーフがイルカと少年の像である。(図9)

一人の少年が貝殻の縁に立っている。その両脇にイルカが倒立している。これは完全にギリシャ・ローマのイルカの再現であり、ローマの街を歩いていると時々見かけるホーズである。貝殻もそう

であるがイルカもそうである。尾は三つ又で、ヘレニズム時代の典型的なイルカである。少年の背中には小さな翼もあるから、唯の少年でなくてケルビムである。ロンドンのイルカの中でこれがいちばんの傑作であると思う。

次はホワイトホール街を真直ぐに行かないで、ここで左折してみよう。この通りはホワイトホール・ブレースである。その左の角に建物があつて、少し行くと入口の前に出る。ここはかつて英国の農林漁業者があつた建物である。そんな関係で、ここで国際捕鯨委員会の部会が度々開かれたから、私も屢々通つた想い出がある。この入口の柱の上にもイルカに乗った人間の像がある。

次でホワイトホール・ブレースを通り過ぎると奇麗な花壇のある小公園に出る。この辺り一帯はビクトリア・エンバנקメントといわれる地帯で、その向うがテムズ河である。テムズ河の左岸の、この辺りにもイルカの大群がいる。ここにも多くの電柱が並んでいるが、下の四角な柱と上の円柱の境い目に、四角な台座の四隅にそれぞれ一頭のイルカが倒立ちしている。(図10)イルカそのものは典型的なギリシャ・ローマのイルカ

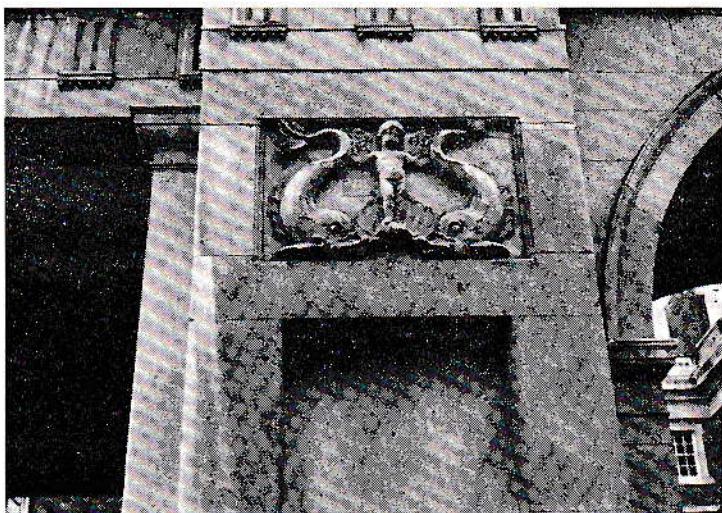


図9 イルカと少年のレリーフ

であるが大事に扱われていなくて、白くペンギンを塗られているのでお粗末に見える。中には図10に示したように、尾ヒレが折れてなくなつていてもそのまま放置されているものもある。この辺りにはずいぶんたくさんの電柱が並んでいるが、いずれもこのよなうイルカ付きである。

英国のイルカの最後に、リジエント・パークの少年とイルカの像

の話を書こう。一九七六年の六月のことである。この年の国際捕鯨委員会の会議にも出席を命ぜられたので、ロンドンに暫く滞在した。会議はウォールドルフ・ホテルで開かれたが、私たちの泊っていたホテルはオックス・フォード街の裏通りで、セルフリッジという百貨店の近くであった。

ある日のこと、オックスフォード・サーカスに出て、そこを左折

してリジエント・パークへ向かった。公園の中に入り込むと、そこに比較的狭いがきれいな花壇があった。その奥の所に変てこな白い像が見えた。近寄って見るとイルカと少年の像である。(図11)

このイルカの顔は典型的なギリシャ・ローマのイルカであるが、尾ヒレは現代のイルカであって、三つ又ではない。少年も現代の少年であって、背中に翼がないから



上図10
ビクトリア・エンバンクメントのイルカ
下図11
リジエント・パークのイルカと少年の像



ケルビムではない。イルカと戯れている所と思うのだが、イルカをいじめている格好ととれないこともない。イルカの現代版は、どうもあまり面白いものがないようである。

次回はイルカとシャチホコの話になります

(一頁末尾から)

を含む緊縮予算案Bが提出され、討議の結果、会報の送付はしばらく続ける事と、会報を新聞型とする等の修正を加えた中間案とし、年度収支二五〇万円の範囲に於て細目の立案を事務局一任とする事に決した。

三、五四年度総会の件

六月八日、築地スエヒロ、会費四千円、料理等昨年通りとした。

四、名簿資料の件

予め各期幹事に依頼されていた名簿の訂正追加資料を集めた。

五、事務局業務の問題点

又、今年度進学者を新入会員歓迎の意味を以て招待する案が提出され、原資の問題も絡み討論された。

又、実行委員は本年は偶数期当番であり、事務局より個別依頼とした。

〇九月九日 神奈川支部総会

江の島恵比寿屋に於て、「江の島会」が関東同窓会神奈川支部として総会を行なった。(事務局)

四二回岩崎氏より、事務局業務

が現在奥野副会長の大雄に全面依存となっている事は今後困難であるうと発言があり、柳川副会長より奥野副会長の健康上の理由もあり早急に対策を要する旨の説明があった。奥野副会長からも、実情としてはなるべく速かに交代を希望する旨申出があり、早急に検討する事とした。

〇六月八日 総会

詳細別掲の通り

〇六月十三日 ゴルフ会

詳細別掲の通り

〇七月二十六日 幹事会

トップランムア社会議室に会長他三五名集り、事務局より総会結果報告が行われ、会報名簿の発送が依頼された。

又、ゴルフ会、ハイキング会等

が話し合われた。

〇九月五日

静岡の同窓会三役会に月見里幹事長が出席し、昨年来縣案となっていた神奈川支部の取扱いにつき三役会との意見調整を行ない、神奈川支部の助成金は関東同窓会で取扱う事とした。

同窓会コンペなど、ご相談ください。

伊豆大仁カントリークラブ 伊豆大仁開発株式会社

代表取締役 石橋 正 秋
取締役支配人 安田 正 弥 (66回)

静岡県田方郡大仁町浮橋字南松城1198-1
TEL 0558-76-2401 (代表)

川 根 銘 茶

三保乃園 山 菅 茶 店

山 菅 章 雄 (53回)
(村 松 正 七)

東京都港区南青山1-20-6
TEL 03-403-5760

宝石直輸入元

株式会社 貴 信 貿 易

代表取締役 土 屋 博 (67回)

東京都台東区上野5-18-4
ダイヤオフィス6階
TEL 03-835-3785 (代表)

新東京印刷株式会社

代表取締役 梶 原 由 三 (67回)

東京都中央区八丁堀2-1-7
神鋼ビル
TEL 03-553-8981 (代表)

建築設計・管理

株式会社 ユニオン設計センター

代表取締役 成 岡 英 彦 (67回)

一級建築事務所登録7425号
東京都新宿区西新宿7-1-9 規格ビル
TEL 03-363-8604 (代表)

総合広告代理店

株式会社 ア ド プ ロ

代表取締役 朝比奈 正 三 (67回)

東京都中央区銀座6-11-20 黒親ビル3階
TEL 03-572-2431 (代表)
米国事業部
イリノイ州シカゴ市ウエストスクール街2031
ジャパンビジネスサービス社内

建築設計・監理

株式会社 奥野建築設計事務所

取締役会長 奥 野 孝 (53回)
取締役社長 奥 野 進 (56回)
取締役副社長 吉 川 善 吉 (56回)
本社 東京都台東区寿2-5-12 加瀬ビル
TEL 03-842-6831 (代表)
静岡事務所 静岡市安東2-8-14
TEL 0542-46-9378

建築コンサルタント・設計施行业務

建築に関する御相談は御気軽に……

株式会社 大 雄

取締役社長 奥 野 孝 (53回)
取締役営業部長 奥 野 広 (58回)

本社 東京都台東区東上野2-18-7 共同ビル10階
TEL 03-834-5331 (代表)

内科・外科・整形外科・皮膚科・放射線科
人間ドック

ねつ かん 熱 函 病 院

院長 小 坂 博 (67回)

住 所 熱海市春日町12-2
TEL 0557-83-3131

アクセサリースペースと憩いの空間
各種ギフト・ゴルフの商品・記念品

サロン・ド・グリーン

土 屋 晃 康 (67回陸上)

東京都新宿区西大久保3-10 プラザ新大樹ビル
(明治通りと大久保通りの交叉点)
TEL 03-204-1251・1371

トッパン・ムーア株式会社

取締役社長 宮澤次郎 (42回)

東京都千代田区神田駿河台1-6
TEL (295) 2411 (大代表)

鈴木株式会社

取締役会長 鈴木与平 (44回)

清水市入船町3丁目12
TEL (0543) 53-3111 (大代表)

株式会社 講談社

取締役社長 野間省一 (44回)

東京都文京区音羽2-12-21
TEL (945) 1111 (大代表)

凸版印刷株式会社

東京都台東区台東1-5-1
TEL (833) 2111 (大代表)

保険代理業 (特別総合代理店)

株式会社 京華商会

取締役社長 岡本敏興 (32回)
専務取締役 今関智吉 (47回)

本店 東京都千代田区大手町2-2-1 TEL (241) 7751
分室 東京都千代田区丸ノ内3-3-1 TEL (211) 7831
大阪支店 大阪市東区淡路町1-12 昭栄ビル内
TEL 06-201-3224

株式会社 東電社

取締役社長 岩波信平 (42回)

東京都中央区日本橋2-1-21
TEL (271) 2701 (大代表)

合同酒精株式会社

取締役副社長 堀豪三 (44回)

東京都中央区銀座6-2 合同ビル
TEL (571) 8641 (大代表)

本田技研工業株式会社

川島喜八郎 (52回)

東京都渋谷区神宮前6-27-8
TEL (499) 0111 (大代表)

新日本証券株式会社

取締役社長 大石巖 (53回)

東京都中央区日本橋1-17-10
TEL (273) 2311 (大代表)

日本レーベル印刷株式会社

代表取締役 岩井平一郎 (57回)

本社 静岡市国吉田645
TEL 0542 (62) 1111 (代)
東京 中央区京橋1-2 越前屋ビル
TEL 03 (272) 4651 (代)